

横浜座の仁左衛門芝居〈摘録〉

三島犀児

〈出典：「演芸画報」大正5年7月号〉

三月には梅幸羽左衛門の顔を合わせて、好劇家をアツと謂わせた横浜座は、今度は仁左衛門を光一にして、源之助歌六などという老功の古兵に、勘弥市蔵などという若手の腕利を左右の翼として、花々しく戦陣を張った。同座を経営する遠藤君の働きぶりはナカナカに目覚しい。

さて狂言は、一番目「聚楽物語」、中幕「大蔵卿」二番目「都一中」大切「弁天小僧」という並べ方である。そして「大蔵卿」を呼物としているらしい。

(中略)

仁左衛門の「大蔵卿」は片岡十二集のうちの一つで、自分は以前から是非見たいと待設けていたものである。また従来の「大蔵卿」とは、ガラリ行方の違ったものと兼々聞いていたので、そこにも多大の興味があって、幕があくと居ずまいをなおして息を引きつめて見物した。

なるほど此の「大蔵卿」は、在来りのものとは、趣も味もガラリと変っていた。舞台の運、白、また料などにしても、大体在来り通であるが、第一に着付が大蔵卿を首として、鬼次郎お京、広盛勘解由鳴瀬に至るまで、すべて有識式とでも謂おうか、所謂活歴化させられていた。何しろ檜垣茶屋のところの門蔵役の茶亭与市までが、芝居ばなれのした其の時代を模したらしい風俗だったので、在来の大蔵卿を見ようとする心もちであったら、大分勝手の違ったものである。しかし仁左衛門が此の「大蔵卿」を片岡十二集のうちに加えた意味も理由も、はた自信も、その在来りのものとは、趣に於て味に於て全く変ったところであろう。然うである。仁左衛門の「大蔵卿」は仁左衛門の創作である。よし大体に於て丸本の本筋を辿り、処々木偶の型や在来りの行方を踏襲しているにしても、趣にも味にも、また此の芝居の性根にもハッキリと仁左衛門の「大蔵卿」が浮出している。されば此の「大蔵卿」は何処までも仁左衛門の「大蔵卿」として見るべきで、在来りのものと行方が違うという理由に依って、此の「大蔵卿」を難ずることは出来ない。尤も在来りの「大蔵卿」の行方と、仁左衛門の行方と、歌舞伎劇としての舞台的效果とでもいうようなものを論ずる段になると、問題は自ら別になる。

先ず檜垣茶屋のところからいうと、この扮装は浅黄の——丁ど六佳選の業平のようななおしに紫小柿の刺貫、わだがたの烏帽子である。本来は参内しての帰途という積りで、黒紋せいごのなおしに浅黄ハツ藤の刺貫、束帯で出るのであるが、今度はいろいろの都合で二日目から、奥殿の扮装とあべこべにして、ここを浅黄のなおしにして、奥殿を束帯にしたとのことであった。そして此の装束はすべて芝居気をはなれて、本行通りであったように思われる。顔も黛だけで、眉を引いていなかった。従って阿呆ぶりも、芝居の阿呆にはお約束のようになっていっているポカンと口をあけているようなことはせず、またいろ

いろな芸当もせず、何処までも一条長成卿の品位と性根とを失わなかった。例えばお京の舞を見ている件くだりにしても、マヌの公卿殿くげどのが舞を見ている心もちで、微塵くすくも擦こって笑わせようというような細工がなかった。只お約束のお京の舞に見とれて、床几しゅうぎを転こけるお約束だけはしていたが、これとても床几に腰をかけたままで、至極アツサリしたものであった。丈じょうの話によると、これも真まンとはするのではなく、大道具が完全であつたら、門から出て、その階きざしに立たってお京の舞を見ていて、見とれて些ちとッと片足踏みははずすことにしているのであるが今度は門が書割で、立つ階の段がない。それで止むを得ず床几を使つかって転こけることにしたとのことであつた。しかして鳴瀬お京は下げ髪、鬼次郎は道服どうふくとも見えるものを着た拵こしらえで、茶亭の与市までが其の頃の下民と思われる扮装であつた。しかし白は勿論、お京の舞其の他、舞台の運は殆ど丸本通りであつた。

曲舞のところは琴唄で幕があいた。勘解由は矢張三枚目あかつらで赤面であつたが、これは侍烏帽子で、素袍すおうを着ていた、広盛もお約束の大紋長袴だいもんながばかの大名仕立ではなく、此の時代の武士の扮装。お京はここでは紫の袴かりぎぬを穿かいていた。そして大蔵卿は、古代紫ろきんの狩衣かりぎぬに、緋のごさ大口おおうちを穿かいて狩衣をぬぐと下は、卵色の着つけ。烏帽子は前のに似て幾らか変かつたのであつたが、これを取ると頭は本式の公卿くげまげ蓄かづらおけであつた。曲舞になると、竹本なしで、お囃はが出て後に並び、大蔵卿は葛桶かづらおけに腰をかけて、自分で猿歌を唄うたって勘解由に舞わせ、自分も立たって舞まつたが、在来りの其のように竹本に乗のって踊おどるようなどころ少しも無く、すべてが狂言の本行に近づけてあつた。しかし勘解由や広盛の斬りかけるところもあり、広盛を呼返なぶして弄あそぶところもあつた。その弄あそぶ方は何やら、広盛に私語きさやくと見せかけて、饅頭まんじゅうの皮を丸めて其の耳の穴へ入れるのであつた。弄あそぶられた広盛は花道で忌々いざいざしがる料があつて、勘解由と共に引ひッ込むと、それを嗤わらう大蔵卿の阿呆笑あほうわらいで幕が閉るのであるが、この阿呆笑が幕が閉りきつてからも少時間しばらく聞きえていた。而して此の阿呆笑が芝居はせずに大芝居になって、仁左衛門の「芸きの鍛たえ」というものを考えずに居ゐられなかつた。よしや仁左衛門の「大蔵卿」のすべてを非難ひなんするにしても、此の阿呆笑から受る感激だけで、充分に帳消の出来る価値があろう、其程に此の阿呆笑は高潮的であつた。

奥殿のところは、鬼次郎が揚弓ようきゅうで常盤を打つところもあり、常盤が清盛の画像を射るところもあり、また常盤のサワリ、大蔵卿の本性を見せるところ、きりりやきりりで勘解由の首を打落すところなど由来りの通りで、「暁の明星」のあたりの如きは、例に依よつて竹本劇のゆつたりとした芝居味をしたたかに堪能かんすることが出来た。ここの大蔵卿の着つけは前に謂いつた通である。常盤の拵こしらえは在来ありきたりの其と大して変かりがなかつたように思おもわれる。勘解由は拵も前の通りそれで「死しンでも褒美ほうびの金かねが欲しい」という白は、些ちとッと不調和な感じがした。鬼次郎お京は檜垣ひがきのところとは模様などに変かりはあつても、姿は殆ど同じであつた。鳴瀬も同様。そしてここの大蔵卿は悠揚ゆうよう迫おらぬうちに、幾分の芝居味を加えて、物静ものしずに大きな、そして上品な舞台ぶりを見せていた。元の阿呆で暮すというところも格別かくべつ気きを変かえず、また幕ぎれにも笑わわず、在来ありきたりの「大蔵卿」に慣ならされた眼まなこには、物足りぬと思おもわれる程、サラサラと運びながら、しかも快く芝居式夢幻の世界に浸ひつていられたの

は、一ツは作の故でもあろうが、一ツは仁左衛門の芸の力に引入られたからと謂わなければなるまい。

概括して謂えば、仁左衛門の「大蔵卿」は、在来の行方にくらべて、余程芝居味を減却されている。すべてに華麗ということ避けてある。それだけ所謂活歴式になっている若しこれを腕のヤワな役者になられたら、或は見ては居られぬかも知れぬ。しかし仁左衛門という役者の個性と芸とによってこなされて、「大蔵卿」に別趣の味と生命とが吹込まれて、見ているうちに知らず知らず引入られて行く面白味がある。そして押出しの立派なこともまた、見物を押えつけて行く重なる要素になっている。

仁左衛門の「大蔵卿」は何処までも仁左衛門の「大蔵卿」である。長所も価値も面白味も、すべて仁左衛門の役者としての個性と芸から来ている。而して自分はもう一度、此の「大蔵卿」を木挽町の舞台で見たいと思っている。

大蔵卿以外の役々のうちでは、市蔵の鬼次郎が些ツと光っていた。我蔵の勘解由は曲舞のところなど、無器用らしいところに反って一種の趣があつた。歌六の広盛は勝手違のところを歌六一流でこなしていた。糸三郎のお京は例に依って貧弱、市之丞の鳴瀬は神妙にしていたとでも謂おうか。源之助の常盤御前はジツとしている間、肩が男であつたのが気になつた。

珍らしくも通して出た『鬼一法眼三略巻』

新富座の大蔵卿

鬼太郎

〈出典：「演芸画報」大正 11 年 2 月号〉

新富座の今度の大蔵卿の芝居に就いて、何でも好いからとの御注文。乃ち何でも関わらず書く、人間は正直が好い。

吉右衛門の大蔵卿は、子供芝居の初役の折早くも大好評を博したもので、数多き当り役の中でも、これが取分け、子供役者中村吉右衛門の名を盛んならしめたと云って好い程の誠結構な出来であつたのである。

吉右衛門は、其の後幾度か此の得意芸を演じている。而して今度の新富座には、歌右衛門の常磐、中車の鬼次郎と云う素敵な相手で檜垣から物語まで出している。彼の大蔵卿、始あり終ありと謂うべしである。

終ありと云うと、最良の中には気にする人もあろうが、今後もう幾十年吉右衛門が生きてからが、今度のような常磐鬼次郎には請合つて出ツ会しッこなしである。歌右衛門中車が又相手になりもしまいし、縦なつた処で、それは二優とも今よりもっと阿爺さんになつ

た幾年か先の事である。外の名優が付合う機会があったにせよ、其の時分の名優などに、常磐や鬼次郎が分かる筈はないのである。即ち吉右衛門の大蔵卿は、大正十一年一月の新富座興行を以て、空前絶後の大舞台とする。

何は兎もあれ、一旦吉右衛門が我が家と思ひ思わせられた新富座に、歌舞伎座一派の引越し出勤、其の義理合の割引もあるとは云え中車が序幕の幕明きから、歌右衛門が自分の出し物の前の加之も序幕から、顔を揃えて付合うとは、吉右衛門の大蔵が、先輩の間にも既に立派に認められていた何よりの証拠である。斯うした役の並びは、近頃珍しい事である。吉右衛門を神様のように云っている御最良には、些とお耳障りでもあろうが、斯様な事は実に破格な割り振りである。而して其処に真の吉右衛門の名誉がある。吉右衛門の体はこれで悉皆大きくなった。

彼吉右衛門の大蔵には、此の前演った時教わった中車の型もある、初役以来の父歌六の型もある、自分の工夫も勿論ある。中車歌六の型と云うものの中には、言うまでもなく昔の名人上手の型がある。吉右衛門の大蔵は、随分と苦勞し工夫したものである。

衣裳の好みは大體自分である。物語の時の扮装は指貫様の袴を穿く型もあるのを、此の人は何時もの如く大口袴で演っている。引抜いてからは、袖無のようなチハヤを、昔通りに用いていながら、其の異様な姿を、今の看客の目に余り立たせまいとして、装束地の引抜と其裂にしたなど、大苦心の処であろう。

檜垣では、昔ながらの子供子供した面ざしが遺っていて、坐に初役の時を思わせたが、それだけに大蔵が若輩に見えた。常磐御前をお下りで頂戴しそうな年輩には無理に見えたが、阿呆の役だけに、これは本人の生地も出るので、愛嬌のあり過ぎるのは已むを得まい。更に言えば、芸は結構であるが、性来から来る此の不足だけが、如何ともなし難い此の大蔵の例のままの瑕である。

座方で舞台を立派にしたがる結果が、白丁を大勢出し過ぎ、大蔵が花道から振返って、鬼次郎と顔を見合わず段取に無理の出来たは残念である。鬼次郎が舞台真中より少し上寄りに立って見込んでいるのを、大蔵が振返って家来を見渡す時、其の止まりに鬼次郎を看付けねば、此の幕切の型は無意味に終るのである。舞台監督無かる可からず。

曲舞の件は無事。馬鹿の象徴たる鼻糞丸めを、綺麗事にして、立って歩いて饅頭の皮や餡を摘み取るのや、御殿の内の菓子の上から蠅を捕えるのや、そんな持って廻った型に則らなかったのは一見識である。勘解由との搦みの廉々に、正気の眼遣いをせぬのも感心である。院本物の狂言は、此の呼吸を知った者にのみ、正しき理解が能るである。

奥になって、簾<sup>すだれ</sup>を揚げてからは、例の調子例の動き、それに派手と上品とを失わぬ<sup>こしらえ</sup>扮装で、立派に面白く、茲<sup>こゝ</sup>に有終の美を済<sup>な</sup>した訳である。尤、茲<sup>こゝ</sup>等で日本一を大向から叫ばせぬようでは、常磐鬼次郎に対して申訳あるまい。今度の二優を左右に置いて、高二重の真中に出る<sup>ひと</sup>筈の優は、九代目市川團十郎の外にこれまで無かったのである。中村吉右衛門<sup>なり</sup>偉也と云わざるべからず、又、幸福<sup>しあわせなり</sup>也と云わざるべからずである。

歌右衛門の常磐は、鬼次郎に苦衷を打明ける件が、流石に類<sup>るい</sup>と真似<sup>まねて</sup>人無く結構である。チョコボに乗って、二重真中での一寸一寸<sup>ちよいちよい</sup>した料<sup>しぐさ</sup>に、何とも云えぬ妙味<sup>うまみ</sup>がある。

中車の鬼次郎は、後進<sup>のり</sup>に範<sup>しめ</sup>を視す意気込みで、檜垣と後との扮装も、昔通りに悉<sup>すつかり</sup>皆と変えて見せるやら、乗りになっても、仰山<sup>ぎょうさん</sup>ならず、而も人形から出た形に時代に動くやら、実に立派な鬼次郎である。

吉之丞の勘解由は、安い処を安く、威張る処を威張って演っているのが手柄。強て云えば、些と仰山なのが瑕であるが、此の優の身分で此の舞台では、十分勘弁してやって好い。外々の役は是非に及ばぬ所。

今後幾年、吉右衛門が又大蔵を出す事もあるうが、其の時の常磐や鬼次郎夫婦は誰<sup>す</sup>が演るか、考えて見る気にもならぬ中から水<sup>ぼん</sup>ッ漬<sup>じ</sup>が垂れる。